

## アトピー性皮膚炎 ( 4 )

2003.3.1発行

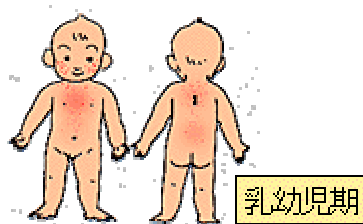
年々患者数が増加しているアトピー性皮膚炎。今回はその症状・治療などについてお話しします。

院長 大崎緑男

### 1. “アトピー性皮膚炎”とは

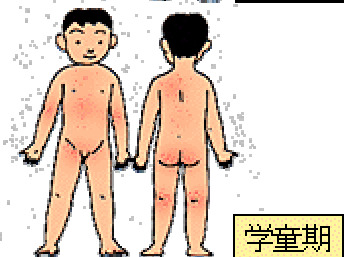
“アトピー性皮膚炎”は、繰り返し出現する強い“かゆみ”を伴う湿疹を特徴とする皮膚炎です。その原因はいまだ解明されていませんが、アトピー体質という遺伝的に“かゆみ”を起こしやすい体質の人が、様々な抗原（ダニ、家塵などの原因物質）や機械的刺激にさらされた時に起きると考えられています。抗原としてはダニ・家塵以外に、花粉（スギ、ブタクサなど）、真菌、動物（犬、猫など）の上皮、昆虫の糞、住宅建材の処理剤などがあります。また、乳幼児期では卵、牛乳などの食物が抗原となることもあります。

### 2. “アトピー性皮膚炎”の症状



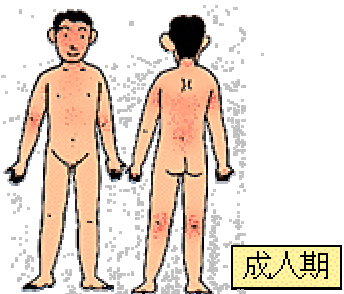
#### 乳児期

生後1～3ヶ月頃から、口の周りや頬に赤いポツポツやジュクジュクした湿疹ができます。湿疹は次第に胸から腹部や手首、足首に広がります。あせもや乳児脂漏性湿疹との区別がつきにくいことがあります。



#### 幼・小児期

顔面の湿疹が減り、肘・膝などの関節部や体の湿疹が増えます。乳児期に比し、皮膚の乾燥がはっきりと目立つようになります。



#### 成人期

湿疹は顔面、上胸部、上背部、肘など上半身に強く現れる傾向があります。思春期や成人期に再発した方は治りにくいと言われています。

(図：アレルギー協会 HP より)

### 3. 当クリニックで行なっている検査

**血清抗体検査 ( RAST 法 )**：血液を採って調べる検査です。ダニや家塵等の抗原に反応する抗体が存在するか調べる検査です。原因抗原を明らかにし、生活環境を整備するのに役立ちます。

## 4. 当クリニックにおける治療

アトピー性皮膚炎の治療には、原因・悪化因子の除去、スキンケア（乾燥肌などの皮膚の異常を整える）による炎症の予防および薬物療法による炎症（湿疹）の抑制があります。薬物療法には以下の薬剤を用いています。

**外用剤**：スキンケアには**保湿剤**（ヘパリン製剤、ワセリンなど）を用います。皮膚の炎症にはステロイド外用剤をはじめとした**消炎性外用剤**を用います。これらは年齢、部位、炎症の程度に応じて使い分けています。

**内服剤**：“かゆみ”を抑えることを主目的として、**抗ヒスタミン剤・抗アレルギー剤**を使用しています。

## 5. 原因・悪化因子の除去

血清抗体検査などで原因抗原が明らかになった場合は、その原因をできるだけ避けるようにしましょう。

**ダニ対策**：1) 掃除をよくする。2) 天気のよい日は窓を開けて、通気のよい環境を保つ。3) クーラーや暖房はつけっぱなしにせず、時々空気の入替えをする。4) 絨毯やカーペットはできるだけ使用しない。5) 猫や鳥などのペットは飼育しない。

**食事療法**：アトピー性皮膚炎に食物アレルギーが関与している場合は、原因の食物を食べないという食事制限が有効なことがあります。ただし、血清抗体検査で陽性だからといって食事制限が必要とは限りませんので、医師の指導のもとに行なってください。

**ストレス**：精神的な要因で、アトピー性皮膚炎が悪化することがあります。可能な限り、ストレスを避けるようにしてください。

## 6. スキンケア

アトピー性皮膚炎の患者さんは健康な人に比べると皮膚の防御機能が弱いのが特徴です。スキンケアを丹念に行なうことにより皮膚を刺激から守り、皮膚炎の悪化を防ぎましょう。

### 皮膚の清潔

- ・汗や汚れは速やかにおとす、しかし強くこすらない。
- ・石鹸・シャンプーを使用する時は洗浄力の強いものは避ける。
- ・石鹸・シャンプーは残らないよう十分にすすぐ。
- ・“かゆみ”を生じるほどの高い温度の湯は避ける。
- ・入浴後にほてりを感じさせる沐浴剤・入浴剤は避ける。

### 皮膚の保湿

- ・保湿剤は皮膚の乾燥防止に効果的。
- ・入浴・シャワー後は必要に応じて保湿剤を使用する（タオルをそっとあてて水分を吸い取ってから）。
- ・患者さんごとに使用感のよい保湿剤を選択する。

### その他

- ・室内を清潔にし、適温・適湿に保つ。
- ・下着は吸水性・通気性の良い素材を使用し、新しい下着は使用前に水洗いする。
- ・洗剤はできれば界面活性剤の含有量の少ないものを使用する。
- ・洗濯糊や柔軟剤は使わない。
- ・爪を短く切り、なるべく搔かないようにする。

何か不明なことがありましたら、お気軽にお尋ねください。